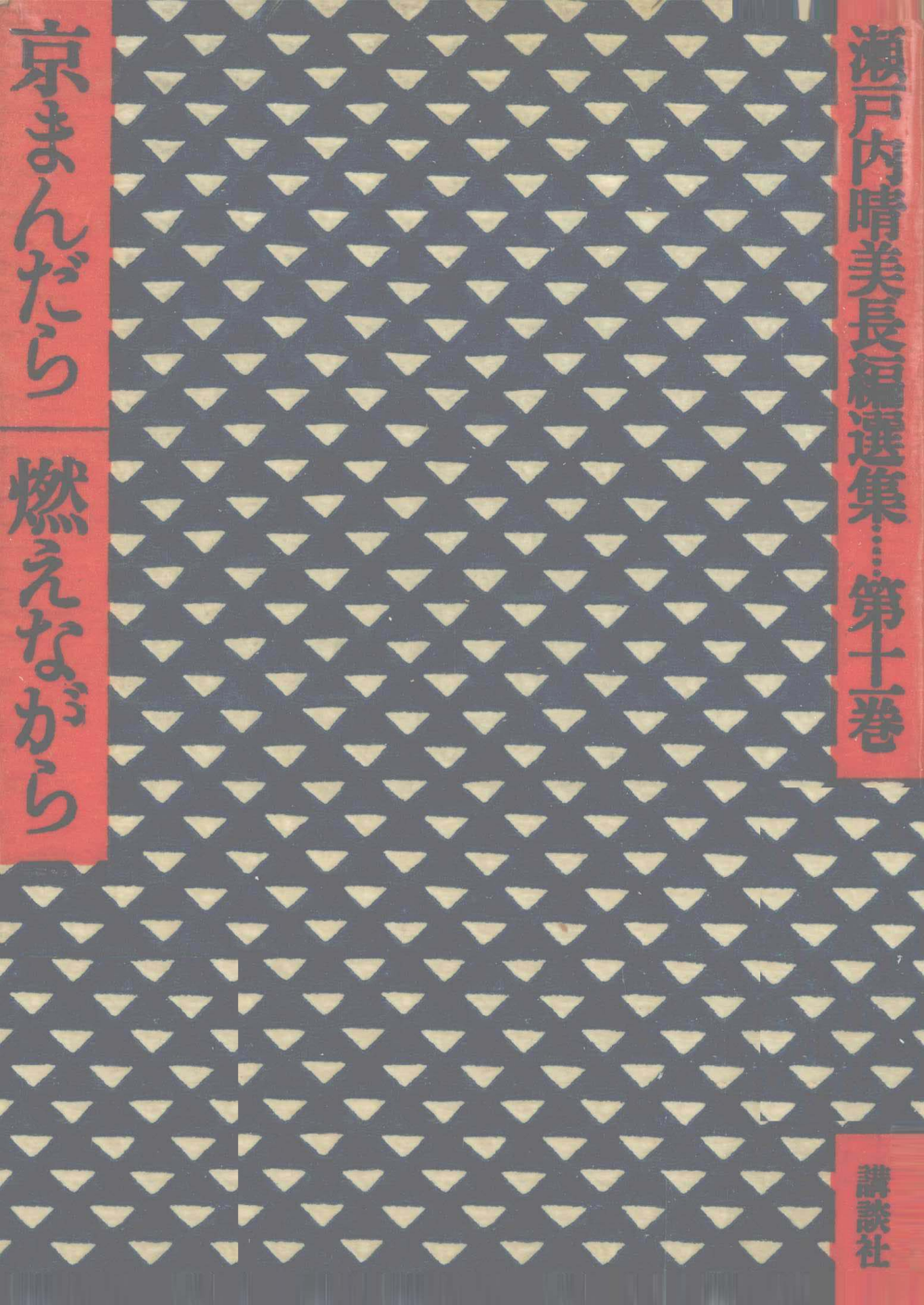


瀬戸内晴美長編選集…第十卷

講談社



京まんだら  
燃えながら



瀬戸内晴美長編選集 第十一卷 目次

京まんだら

—  
5

燃えながら

—  
417



瀬戸内晴美長編選集 第十一卷—京まんだら・燃えながら  
昭和四十九年十月二十日第一刷

著者—瀬戸内晴美 造本—杉浦康平・海保透 発行者—野間省一

発行所—株式会社講談社 東京都文京区音羽二—十二—二十一 郵便番号—一二三

電話東京(〇三)九四五—一一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社・株式会社興陽社 製本所—黒柳製本株式会社

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

©瀬戸内晴美 昭和四十九年 Printed in Japan





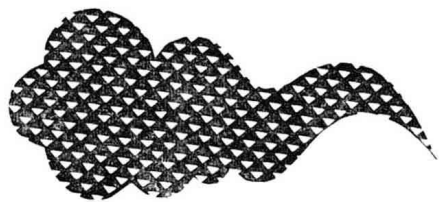
瀬戸内晴美長編選集 第十一卷 目次

京まんだら — 5

燃えながら — 417







京まんだら

## 浄夜

「ほ、聞いとおみやす」

次の間から声がした。座敷の客たちはいっせいにことを切った。

「ほら……鳴りはじめましたえ、聞えてきますやる」

この宿の女将の雪村英佐が、階段を上ってきたばかりの、入口の屏風の前で足を止め、それを知らせている。両手で胸の前にかかえた盆の上に、新しいヘネシーとオールダーの瓶が載っている。まるい顎をややつきだすようにして、小首をかしげ、廊下をめぐるたてまわされている雨戸の外に響くものに、耳を澄ませている表情だった。

「ほんと、聞えてる」

「あら、二つ聞えているじゃない、ちがうお寺のかしら」

「しいっ」

口々につぶやいた声を自分たちで制しあつて、座敷の女たちはまた静になった。

鐘の音はゆっくりと、尾を引きながら、無限の夜を泳いでくる。この家の雨戸に達するまでには音の響きの輪は次第に大きくひらききり、波紋はやがて家を包みこむようにせまってきた。たしかにふたつの音色のちがう鐘の音が、ほんの少しのずれをみせて二重奏をかなでていた。

女将のあとから水入れと水差しを持ってきた女中が、すぐ気をきかせて、雨戸を繰りにいった。雨戸が一枚開いた

だけで、鐘の声は、急に身近になり、二つの音色の差も、きわだってきた。

「よろしゅうおしたな、やっばり、おけら詣りからうちへまっすぐ帰らはってて」

客たちが無言で、莊重な、如何にも年を送るにふさわしい鐘の声に、しんとうたれている間に、女将は、いつのまにか、座敷の方へ移っている。

十畳の部屋の中真中に、千羽鶴の友禅縮緬の蒲団をかけた電気ごたつがしつらえてあり、女客が四人、それを華やかに取り囲んでいた。

一人だけ目立って若く、他の三人は似たりよったりの中年だった。四人の中で一番化粧が濃く派手な色の服を着ている植田敏子だけが、女将の英佐にはなじみの客で、他の三人は今日の大晦日の屋すぎ、はじめて敏子から紹介されたこの「ゆきむら」に泊り客として迎えたばかりだった。

部屋へ入るなり、真直床の間へ進み、宝船の軸を見上げて、

「抱一ですか」

とつぶやいたのが、随筆家の菊池恭子だった。南部の紫根染めの紋りに、白っぽいつづれの帯をあわせ、床の間を背にしている。薔薇を根じめにした松が飾られている床の間には、すでに新春が迎えられていた。

恭子と向いあっている白いスーツ姿が、カメラマンの関なおみ。襖に背をむけているのが敏子の姪の律子で、出版社の社長をしている敏子の秘書をしていると紹介された。パンタロンにセーターというみなりと、畳にとどくほどの髪ゆたかさが、化粧気のない律子の若さをいっそうきわだたせている。

化粧や衣裳の好みはコケティッシュなほど派手好みなのに、中身は男よりもさっぱりとしている植田敏子は、仕事で京都を訪れると、必ず「ゆきむら」を常宿にしていたし、英佐の祇園のお茶屋「竹乃家」の常客でもあった。

戦後は祇園にも女客が上るようになったが、まだ、女が主人役で、人を招待することはあまり例がない。そんな中で、敏子はいつでも、男の客を案内してきて、爽やかに遊んでいく。芸者や舞妓たちにも何人も馴染みが出来ていく。

敏子の訪れる前には、いつでも、二、三日前か、遅くとも前夜に東京から電話が入る。「ゆきむら」に部屋はあいているか、何日の夜「竹乃家」でお客が出来るかという問い合わせだった。

祇園町の「竹乃家」の方は、時間さえずらせてもらうと、何とかなったが、「ゆきむら」は三部屋しか客用には使っていないので、稀には敏子を迎えられないこともある。

「は、せんせですか。長いことです。お変わりございませんでしたやろか。へ、つい、きのうどしたか、ほれ、新聞

に、せんせとこの御本の広告が、えろう派手に出てましたやろ、あれ拜見して、夢子さんやみゆきさんと、せんせんせのお噂してましてん、せんせ、くしゃみしやはらしませんどしたやろか」

低い、ややしゃがれた声で、蚕の糸を繰るように、英佐がとめどもなくゆるゆる喋りはじめると、京ことばというのは、相手が口をはさみこむ区ざりがみつからない。いうだけいわせておいて、英佐が一息ついた瞬間に、敏子は用件に入る。泊りは何日、祇園での客の数は何人、自分との関係はどういうものか、手短かに話す片端から、英佐は回転の速い頭でびしびしと受けとめ、記憶の壁に万事灼きこんでおいて、声だけは相変らず、まるで冬の日ざしのようなのどやかさを乱さず、答えをよこす。

「へえ、そうどすなあ、竹乃家の方はお時間通り、丁度座敷も都合よいてますけど、えろうすんまへんどす、ゆきむらが生憎どすねん。どうしてもお断りてけしまへんお客さんがおいやすねんどす。三日のうち、おしまいの夜だけは、ひと組お発ちやすのんどすけど、一晩くらいやったら、かえってせんせの方で面倒どっしゃるなあ、どないしまひよう。ホテルとつときまひようか、それとも、津川を訊いてみまひよか」

「そうね。それじゃ、今度はホテルにお願いしようかな、じゃ、よろしくね」

「へえ、よろしおす。早速、ホテルの方、お部屋とらせていただきます。九日から三日間どすな。ほなら、お待ちし

てますえ、お早うお越しやす。うれしいわあ、お久しぶりどんなあ、またゆっくりお話でけますなあ。へえ、もう、たんと、聞いていただきたいことがたまってますねん。ほんらごきげんよう、へえ、さいなら」

いつでも似たような同じ事務的な電話だけれど、英佐と電話で話をすると、まるで恋人との電話のあとのように、情緒が心からみついて、しばらく、京都の町や川や、山のたたずまいが臉をよぎり、まるで郷愁のように、一刻も早く、京都へ発ちたいという気持ちに敏子はせかされるのだった。

小さくとも、一応は成功した女実業家として、世渡りしている以上、たいていのお世辞には馴れきっている敏子も、英佐のおよそ抑揚のない低い声を聞いているうち、仕事で荒ぶった神経が、いつのまにかなだめられ、採みほぐされている。天性のものか、職業でそのように鍛えたものか、敏子にはまだ英佐の語り口の不思議の秘密が見ぬけていない。

今度のことは、もう半年も前から予約してあったので、「ゆきむら」の部屋の心配はなかった。以前から企画していた「古都旅愁」という豪華本の打ち合せを兼ね、京都でそのメンバーで揃って越年をしようというのが目的であった。もちろん、費用は敏子が振舞うことになっていた。

京都のことを書いた本や、写した本はすでに数えきれないくらい出ていたが、敏子は自分の企画に七分の自信を持っていた。あとの三分は、どんな出版でも賭であろう。

紀行文を書かせては独特の筆を持つ菊池恭子に縦横の筆を振わせ、風景の捕え方に、これも個性的な角度を発見している関なおみに、これまで誰も描えていない古都のあらゆる表情を撮らせ、一冊、二、三万円の豪華限定本をつくらうというのが、敏子の今度の計画だった。

七年前死んだ亡夫の遺産で、出版を思い立った時、ここまでのびるとは考えてもいなかった。手記物ばかりを四、五点出すうち、十六歳で死んだ少女の口記が、思いがけないベストセラーになり、百万を突破したことから五つに二つは当るようになり、植田書房の名は、出版界に頭角をあらわしてきた。次に、一世一代の道楽のつもりで出した着物の豪華本が、予想以上の売れ行きを示し、敏子自身も全く思いがけない大成功を収めたのだった。当り外れはあったが、その後もつとめて豪華本を扱い、今では手記物やハウツー物であって植田書房からは、すっかりイメージ・アップしている。

よきにつけあしきにつけ、男より大胆な商法だと、仲間うちでは評判されているが、敏子は結構自分を石橋叩いて渡る方だと考えていた。柳の下にじょうは一匹でなく二匹はいること、しかし三匹はいないことを悟っているだけだ。一つの企画で成功した時、敏子はもう次の企画を探している。人の心ほど移り易く、日本人ほど新しい物好きな人種はいないことも識っているつもりだった。

耳を澄ますと、除夜の鐘は二つではなく、遠くから近くから、無数の音へ波紋が拡がり、互いにやさしく、あるい

は猛々しく、時には鋭く、からみあい、もつれあい、おおどかな交響楽をかなでている。莊嚴なその高まりが宇宙に風をおこし、今、ゆるやかに新しい年にむかつて地球を廻しているような想いがしてくる。

鐘の音が空気にとけこんでしまい、百八つが鳴り終るまでには、座敷にはいつともなく談笑がかえっていた。

英佐のついでまわったウイスキーやブランデーがそれぞれの客の前に置かれ、琥珀色の液体を灯にきらめかせている。

どの女もみんな酒のたしなめる口だった。

「頼もしおすなあ」

英佐におだてられて水割りをもうお代りしている律子に、敏子が目顔でたしなめた。

「いいじゃない、除夜の鐘聞きながら酔っぱらうなんて最高よ、ねえ」

律子は横の閑なおみに甘えかかるようにいう。

「大丈夫よ、律子ちゃんはおわばみなんだから」

閑なおみが、あまり表情の動かない冷いほど端正な顔でいう。声は顔だちに似ず、はっとするほど甘かった。

「やあだ。おわばみは誰かさんでしょうだ」

律子は、浮き浮きした声でいいながら、しなだれかかるようになおみの背を叩いた。

「この中でどなたが一番お強うおす」

「そりゃ、閑さんね」

敏子も女にしては決して弱い方ではなかったが、即座に

いった。

「へえ、そうですか、見かけによらしまへんなあ。なんやこうしてみてますと、植田せんせが一番、お強いように見えますけどなあ」

「あたしと菊池さんがどっこいどっこいってとこね、律子なんか、だめよ。お酒の味なんかわかってるんじゃないくて、ただ酔えばいいんだもの、修行がたりてませんよ」

「閑さんはそんなに強いのか」

菊池恭子が一重瞼の仏像のような目をまっすぐ閑なおみの顔にあてていう。

やや、浅黒いなめらかな皮膚を灯に輝かせ、なおみは顎をひいてくくつと咽喉で笑った。

「伝説ですわ、そんなにのめやしません。律子ちゃんくらいの時はあたしもずいぶん無茶しましたけど、もう年ですから」

「あら、いやね、年のことなんか」

敏子が華やかに打ちつけた。

「そういえば、今、この鐘の鳴り終ったところで、またひとつ、年とりましてんなあ。わたしら、やっぱり旧弊どすねんか、やっぱりお正月さん迎える毎に、年ひとつとったと思う気持から、まだぬけられしまへんねん」

「女将さん、数えていくつになったわけ」

「五十二どっしやろか、今流に言えばまだ五十どすか。昔なら、もう人生終ったいうところどすなあ」

「まだまだ」

敏子が芙佐のブランデーグラスをみたしてやりながらいう。

「そう色っぽいと、とても人生終らせてなんかくれませんよ。まだ、その帯の間に例の恋文の束いれてるんでしょ」

敏子がそれを一座に披露するようにいう。

「へえ、おおきに」

芙佐が右手でゆたかな胸を押え、軽く頭を下げたので、みんながいつせいに吹きだした。

恋文を持っているだろうといわれて、どうして有難いとお礼をいうのか。笑いながら、敏子がからかうと、芙佐はいっそう大真面目な顔をしてぬけぬけと答える。

「そやかて、せんせが、たったいっぺんしかわたしの話さへんことまで、そない、よう覚えておくれやしたということが、もったいのうて有難いことどっせ。人一倍おいそがしいお方で、仰山考えごともおありやる思いますのに、わたしなんかの古い恋文の心配までおかけしたかと思うと、罰が当りそうやおへんか」

「恋文ってなあに、おやすくない話ね」

菊池恭子が興味をそそられたように訊く。

「この女将さんはね、昔の恋人の恋文を白絹に包んで帯板がわりにいつでも胸に抱いているのよ。あたしは一度、見せてもらったことがあるんだから」

「へえ、今時、純情な話ね」

「わあ、恥し、どないしまひょう。穴があつたら入りとうおすわ」

「ね、ね、それ、初恋の人？」

律子も興に乗った弾んだ声を出す。

「さあ、あれが初恋いうんどうっしゃろかなあ。何せ、わたしは十三の年から、もう祇園町に奉公に出てましたさかい、ゆっくり恋など味わうひまもおへんでしたからなあ」

「じゃ、それ、いくつでももらったもののなの」

律子が遠慮のない早口で喰い下る。

「十七から十八にかけてどす」

「ええ年頃でんなあ」

それを律子が怪しげなアクセントでいったので、みんなが吹き出してしまった。

芙佐は年より地味な草木染の小紋の着物を、小肥りの軀にゆつたりとまきつけ、玉虫色に光る紫の西陣の袋帯で締めていた。その帯と乳房の間に、むっちりした片掌をさし入れ、糸切歯を出して笑み崩れる。笑うと、厚い上唇がいたずらっ子のようににめくれ上り、下ぶくれの童顔が、いっそう無邪気に稚っぽくみえた。

「相手は役者さん？」

菊池恭子が物書きらしい訊き上手さで、さりげなくいう。

「いえ、役者はんやおへん」

「それがねえ、ドラマティックな人物なのよ」

敏子がそるように口をはさむ。

「ね、女将さん、もういつてもいいでしょう」

「へえ、かましまへん」

「甘粕大尉なのよ」

敏子がちよつと声を張った。

「甘粕大尉って、あの、大杉栄を殺した、憲兵のあれ？」

菊池恭子が思わず肩を乗りだすようにした。

「ええ、そう、大震災のどさくさの時、連れていって、大杉の奥さんの野枝と、甥の小っちゃな子供まで締め殺したあの男よ」

「なるほどね、たしかにドラマティックな人物ね」

敏子の話に、菊池恭子がいつそう興をそそられた表情になった。

「律子さんは知らないでしょう。甘粕だの、大杉だのって」

そう訊いたのは、それまでだまっていた関なおみだった。

「ううん、大杉栄と、伊藤野枝は知ってる。本でも読んだし、映画もあったし」

「ああ、神近さんのモデル問題でもめたあれね」

「あたしたち、若い女は大杉栄って好きよ。フリーラブの先駆者でしょ。次々女の人をものにしていくんでしょ。きつと魅力あったのよね。でも甘粕大尉ってのは忘れてたわ」

「いつ頃なの、女将さんと甘粕さんの恋の季節っていうのは」

菊池恭子がいう。

「へえ、あのお方が満州時代のことです。えろう羽振りの

いい全盛時代でした。わたしはお茶屋の女中でしたから、あのお方がどういう方やら、それまで何して来られた方やら何も知りまへんでした。ただもうやさしい、親切な、りっぱなお方やとばかり思うて、夢中でした」

「水揚げされたのが彼なんですか」

「女中ですから、舞妓さんや芸子はんみたいに水揚げとはいいしまへんけど、実質的にはそうでした。わたしにとつては、はじめての男はんどす」

次の間に足音がして、襖が静にあけられた。敷居際に、朱色の大矢羽根の緋の御召に、麻の葉絞りの帯をしめた少女がかしこまっていた。

「今晚は」

「あ、わか子ちゃん、いらっしやい」

敏子が声をかける。

「娘のわか子です。よろしゅうお願いします」

女将の笑佐の声にあわせて、少女が行儀のいいお辞儀をした。やせっぽちで有名なイギリスのファッションモデルに似た軀つきは、タオルをしぼりあげたように細くて、まだ色気もない。小麦色の頬がすき透るように清潔で、切れ長なやや吊り上った目や、細い指が、シャム猫を連想させる。ほどけば、たぶん律子ほどある髪を、ひきつめて頭の上に固い髷にして結んでいた。リボンも花も何ひとつつけていないのが、若さをいっそう目立たせていた。

「わか子ちゃんてかわいい名前ねどんな字」

親しそうにふりむいていったのは律子だった。

「稚いいう字です。幼稚園の稚です」

「ああ、お稚子さんの稚ね」

「そうどす」

若いふたりはうなずきあって、すぐ心を通いあわせた。

「稚子ちゃんは大学？」

「いえ、まだ高校です。一年落第して、二年です」

「稚子ちゃんの前では、女将さんラブレターの御披露はできないわね」

敏子がいいうのを、稚子が憐の燃えているような目をはつきりとみひらいて打ち消した。

「何でどす。おかあちゃんの恋物語って、うち、正式に一度も聞かしてもらたことないんどす。この際、聞かしてほしいわ」

「わあ、かなわんわあ、どうどっしやる、このひと、いつのまにこんなませたこというようになっただんどうしやる」

芙佐の声はいつもより華やいで、自分の娘を、一瞬、珍しいものでもみるように、肩をひいて、つくづく眺めた。  
「稚ちゃんは、こんなに可愛らしいのに舞妓さんには出さないんですか」

何でも知りがる菊池恭子がまた質問する。

「へえ、祇園町のお茶屋はんは、家の娘を出きはらしまへんねえ。そういうしきたりどす。先斗町は、お茶屋はんで、娘さんがあったらどんな出きはりますなあ。それも、どうということのうて、昔からそういうしきたりどっしやるか。うちのこの子なんかは、子供の頃舞妓さんが好

きて、どうでも出たいいうてましたけど、高校に入った年の夏休みに、英語の家庭教師の先生がアメリカへお嫁にいかはったら、その方について一年もアメリカへいてしても、はらはらせられたんどっせ」

「へええ、すてきねえ」

誰よりも感嘆したのは律子だった。

「それでアメリカで一年間、何してらしたの」

「メイドみたいなもんですわ。うちの先生がむこうへつくともなく赤ちゃん生まはりましたからお守りしたり、台所手伝うたり」

「何でまたいってしまったの」

「うち、放浪癖がありますねん、小さい時からすぐふらふらっとどこまででも歩いていてしまうんどす」

「ほんまにそうどっせ」

と、芙佐がことばを受けついだ。

「幼稚園にあがる前も、八瀬の花売りの娘はんの後しとおうて、迷い子になってさんざん心配させられましてん。出町の方の交番に保護されていて、助かりましたけど、何ばうか心配させられたかわかりまへんのどす」

「小学校の時も、淡路まで行ってしもうたわね」

「そうそう」

「それじゃアメリカ行きも、そのつづきみたいなもの？」

「へえ、そうどす。もっと、いたかったのですけど、おかあちゃんが、仮病使うて、呼びもどきはったんどす」  
芙佐がまるい肩をすくめた。

「でも、今のところ、おかあちゃんが可哀そうやから、うちがこの商売ついでだけようかな、思うてます」

稚子は、はきはきいう。

「姉ちゃんが二人いますけど、二人とも水商売大きらいやいますから」

芙佐が自分の部屋へ引きとつたのは、もう三時を廻っていた。

「ゆきむら」は三年坂に沿って縦長に敷地があり、道に面した門から玄関まで丁度三年坂の半分ほど、登り坂の小道がつづいている。その小路は石を畳み、両側は竹やつづじで飾ってあるので、門をくぐれば、すぐ、どこかの寺の中へでも入ったような静けさがあつた。母屋は客と女中たちの部屋にとり、芙佐は、玄関脇に二階屋を建て、そこを、三人の娘と自分の住居にしていた。

祇園にお茶屋「竹乃家」の外、四条の小路に、民芸風の構えで、しゃぶしゃぶと鉄板焼の店「おふさ」、その上、木屋町にバー「フラフラ」を経営している雪村芙佐は、ただの女将というよりは既に有能な女実業家のひとりであつた。芙佐はすべてが水商売のこれらの商いの外に、三人の子供を置いて育てたかつたが、そんなぜいたくは許されなかつた。漸く、「ゆきむら」の入口に、家族だけの住いをつくつた時の喜びは、つい昨日のように思えるのに、もう十年もの年がすぎている。

芙佐は雨戸を閉めめぐらせてある部屋の真中に立って、帯をほどいた。帯紐をとき放ち、帯あげをゆるめただけ

で、全身が何かに撫でさすられるようなくつろぎがあつた。

毎晩、繰りかえずこの動作は、時々、思わず、その手を休めさせるほど、深い安堵を呼ぶこともあり、気をはりつめて持ちこたえてきた深いこもつた酔いが、帯締をゆるめた瞬間、堰を切つて全身にとどろきあふれ、思わず、膝をついてしどけなくそこにうち伏してしまうこともあつた。

またの日は、次々重なる商いの上での不手際や行きちがいの屈辱や心労が、一挙にせめよせてきて、帯に掌をあてたまま、ふと、それをほどく手順も忘れ、がっくりと顎を胸に落しこんでしまう時もあつた。

今夜の芙佐は、適当な酔いと、それよりやや上廻つた気疲れとに加え、妙に華やいてゐる心の弾みが添つていて、ようやくひとりになったこの時間が、ふしぎになつかしく思われた。

朱塗りの、もう娘たちに似合いそうな丸鏡のついた鏡台の上に、だてじめ姿のまま、腰を落して横坐りになると、鏡の中の自分をしげしげと覗きこんだ。

色白の下ぶくれの顔のりんかくのせい、年よりは若く見えるが、午前三時というこの時間にはかくしようのない疲れが滲んでいる。目の上や目尻には小さな皺がうかがえ、臉の下にはふくろが出来ている。よく眠たりた朝には、後かたもなくなつてゐるそのふくろが、十二時を越すと、どうしようもなくあらわれてくる。

芙佐は顎をつきあげ、自分の頸筋を映してみた。掌でな

であげ、なでおろしてみる。まだ頸の皮膚はたるみもなく、顔よりなめらかな軀の手ざわりを伝えて、しつとりと、吸いつくようなしめりを持っていた。衿をかきひろげると、芙佐はためらいなく乳房のひとつを鏡の中にひきだした。

軀の中でこよりも白い皮膚につつまれて、乳房は灯を吸いあつめ、照り輝いている。外見ではまろやかに張りがあり、皺ひとつかがえない。娘の頃は、着物姿の胸元が崩れるので、さらして巻き押えても、盛り上りあふれていたゆたかさだったのが、さすがに三人の娘に存分に吸わせただけに、握ると、つきたての餅のようななめらかさで指の間に崩れこんでくる。

それでも、乳首はそういうたちなのか、娘のように小さくて、色もほのかな赤さを残している。

芙佐は更に衿元をくつろげて、もうひとつの乳もひき出して並べた。右の方が左の方よりやや大きい。

女のからだの中のものはずべて左右がびつこだといい、ほら、ここもだと、思いもかけない場所に手をとって導き、比較させたのは誰であったか。芙佐は、顎をひき、自分の乳房を両掌で珠を扱うようにすくいあげ、その間に生れる深い谷間に目を落した。そこに泉湧き、光り、あふれたたつた汗の量は、五十歳の今日までにどれほどのものがあつただろう。十四の年の乳房、十六の時のそれ、二十、二十八、三十三、四十五、そしてこの年々の乳房の重さと固さが、芙佐の掌によみがえる。その時々の大きさの

宝珠をいづくしみ、あるいはさいなんでやまなかった男たち——。こうして鏡の前にいる芙佐の背後から乳房ごと抱きすくめるのが好きだった稚子の父親。女の乳房は、女の何よりの勲章だ。こんな見事な勲章をふたつも胸にかかっているのを芙佐は誇りにしていんだよと、囁きながら、はじめての夜、何度となくやさしい口づけをしてくれた甘粕。それから……あの人は……もうひとりの人は……。芙佐は自分だけの胸に畳みこんである男たちのそれぞれがう愛撫のしぐさや癖を思い浮かべながら、鏡の中に見入りつづける。

記憶の中では、倂と愛撫の癖が、うっかりまちがっていて、ああ、それはちがう、そうするのはあの人だったのだと、あわてて記憶を訂正することもあった。

まだ胸も腹も、老醜は滲んでいなかった。

十代の時、五十歳の自分のこんな若さを空想したことがあつただろうか。

芙佐は、思わず洩れた重いため息を洩らした。

人目も、世間も、投げうっていいと思うほどの激しい恋をしたこともある。子供も、義理もふり捨てて、いっそ遠くへ駆け落ちしてもいいと思ひこんだ恋もあった。

義理の別れもあれば、煮えかえるような裏切りに逢ったこともある。それより以上に、自分の中の思いもかけない悪魔に躍らされて、我ながら信じ難い裏切りをしてみせた覚えもある。

そのどの夜にも、乳房の谷に汗と涙をしたたらせて、女